別所憲法９条の会 たより

2024年10月 第194号

10月に入ってもじめじめした日々が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？　8日はもう寒露です。夜が長くなり朝晩は冷え込みますが、日中は空気が澄んで青々と高い空が広がり、夜は月が美しい、深まる秋の頃なのですが、暦の秋がおよそ程遠く今しばらく待つことになりそうですね。それでも、味覚の秋はたくさん到来しており、さっそく栗ご飯を炊きました。食卓に上る秋の味覚と共に、短くて貴重になりつつある秋らしい秋を楽しみたいですね。

自民党の石破茂総裁が第102代首相に就任し新たな内閣を発足させました。安倍派議員は入閣しなかったものの、女性閣僚は2人のみ、所信表明演説では日米地位協定改定や選択制夫婦別姓には言及無し、何よりも国会での首相指名受ける前に9日衆院解散と憲政の常道に反する言動に呆れます。裏金事件で不記載があった現職国会議員、支部長計43人について比例代表への重複を認めない、党内処分が続いている12議員を小選挙区で公認をしないとの発表がありましたが、そもそも実態解明が全くなされていないまま、これで信頼回復をと思われているのでしょうか？　野党には、せめて裏金議員のいる小選挙区で野党候補を一本化し、政権交代を前面に出し、私達有権者が政治改革へ向けて審判を下す機会になることを期待しております。

10月の例会

日 時　10月28日(月) 13:30～16:00

会 場　長池公園自然館　第一会議室

内 容　**DVD上映『太平洋戦争への道N01』(半藤一利監修)**

▶上映後に意見交換します。

▶岸田政権から更に軍事同盟強化、軍備強化が認められる現状です。開戦当時の状況を見ながら考えましょう。

参加費　300円

新型コロナ感染症対策については会館の指示に従ってご参加下さい。

9月例会報告

9月例会は、満蒙開拓団の経験者の話を聞いたメンバーからの報告を聞き意見交換しました。

終戦を迎え関東軍に置き去りにされた満蒙開拓団の人たちの悲惨な逃避行、特に今回は葛根廟事件を体験され、奇しくも生き伸びた方の話を主に聞きました。

ドイツが降伏した後、ロシアが満州に攻め入ることを政府は分かっていながら住民に知らせず、さらに8月にも開拓団を満州に送っていたという実態や、ロシアの侵攻前に関東軍や政府関係者家族だけが先に避難帰国したと言う事実に改めて怒りを覚える内容でした。

残された開拓団の人たちの苦難の様子を具体的に聴き、改めて、戦争を始めるもの、そして市民を守ることをしない政府の実態を確認した内容でした。

例会での発表の要約をホームページに掲載しています。

検索 ⇨ 別所9条の会 ⇨ 満蒙開拓団

堀之内駅前での宣伝
今月はお休みします。

10/19(土)10:30
八王子アクション
JR八王子駅北口

10/19(土)14:00～
戦争への道NO！
総選挙勝利！自民党政治NO！
国会議員会館前行動

福田村事件

【上映会のお知らせ】
当会のホームページにも掲載しています。

10/12(土)
10:00 ＆ 14:00
開場はそれぞれ30分前

町田市民フォーラム3Fホール
JR町田駅より徒歩8分
当日券 1.200円
事前申込み不要

1923年関東大震災、福田村の利根川沿いで9名がいわれなく殺された。でも、この事件を知る人はほとんどいない。皆が見て見ぬふりをしてきた。惨劇が起きてから100年が過ぎ、事実を知る人はもうほとんどいない。

なぜパレスチナで紛争？ 後編

【遅くなりましたが、2月号裏面掲載の続きです】

3. 戦火に明け暮れるパレスチナ

歴史的な裏付けのない言説をもとにしたユダヤ人の願望と要求、欧米の都合によってイスラエルという国が成立した場所は、ユダヤ人のものでも欧米人のものでもなかった。そこに住む人たちの土地を奪い、追い出すという暴挙が抵抗運動を生むのはごく自然のこと、今日に至るパレスチナ紛争の発端である。シリア、レバノン、トランスヨルダン、イラク、エジプトは、イスラエルの建国宣言に対し、すぐさま侵攻、第一次中東戦争が起きた。停戦でパレスチナとイスラエルを分ける暫定的国境線が設定され、グリーンラインと呼ばれている。

エジプトのスエズ運河国有化宣言に対し、運河権益を奪還しようとする英仏の武力行使に同調したイスラエルが参戦したのが56年の第二次中東戦争。さらに67年のエジプトとの第三次中東戦争での勝利により、ヨルダン領だった東エルサレムも奪い、イスラエル領は4倍になった。73年の第四次中東戦争で、エジプトとシリアの挟撃に遭うも、イスラエルの反撃が成功するまで待った米が停戦を提案。79年、エジプトとイスラエルは米の仲介により、エジプトはイスラエルの存在を認め、イスラエルはシナイ半島を返還し、ガザ地区とヨルダン川西岸のパレスチナ人に自治を認める《キャンプ・デービッド合意》に達した。

イランでは79年にイスラム革命が起き、翌年、イラクとの間に戦争が勃発。90年のイラクによるクエート侵攻で湾岸戦争が起き、中東情勢は二転三転する。イスラエルに蚕食され続けることに危機感を抱くパレスチナの人々は自力でゲリラ活動を展開、そこから出現したのがパレスチナ解放機構（PLO）だった。この独立運動は、イスラエルの存在自体を認めない人、対話を求める穏健派、投石する民衆、ハマスのような過激派が複雑に絡み合っており、ひと括りにはできない。

オスロではイスラエルとPLOの間で秘密和平交渉が持たれ、92年、イスラエルのラビン首相とPLO、アラブ諸国と間で和平合意に至った。しかし、2001年の米国中枢同時多発テロを契機に、アフガン侵攻、イラク戦争、シリア内線と、世界はテロと対テロ戦争の渦中へ。イスラエルはパレスチナの独立運動をテロとみなし、武力行使を含む強硬姿勢に転じ、ヨルダン川西岸地区への入植と、世界中がアパルトヘイト壁と非難する分離壁の建設を進めている。

《オスロ合意》を無視するかのようなイスラエルに対し、23年10月、ハマスは大規模な奇襲攻撃と人質作戦を展開。過去に何度もガザ地区を空爆してきたイスラエルはハマス殲滅を掲げた大規模な兵力を投入、空からの攻撃に加え、地上軍を侵攻させた。ハマス戦闘員だけでなく、一般市民の犠牲も拡大、死者は3万人を超えている。食料や医療支援も滞り、ガザの人口の4分の1、50万人が飢餓状態にあるという。

南アフリカは国際司法裁判所に、今回のイスラエルの戦闘行為がジェノサイドに当たると提訴。かつてアパルトヘイトを非難した国際社会は同国に対する経済制裁を実行したが、イスラエルに対してはいつも及び腰である。なにかにつけ「ホロコーストの犠牲者」を口にするイスラエルだが、パレスチナの人々にホロコーストの責任はない。あるとすれば、それはヨーロッパ社会だ。イスラエルによって、絶対悪であったホロコーストが相対化され、今や歴史上の悪の一つに成り下がりつつあるのはなんとも皮肉なことである。

歴史を俯瞰すれば、矛を収め、譲歩すべきはイスラエル側にあるのは明らかである。民主主義とは、多数派が少数派に対し、強者が弱者に対し、どれだけ譲歩できるかで決まるものなのだ。イスラエルに自制を求めるとともに、同国の軍需産業と取引のある企業に対して関係を断つよう求める市民運動も出てきた。本当は、そうした企業内部から声がわき起こることが望ましいのだが、人間の命より自社が儲かり、結果として自分たちの給与が上がることの方が重要だとする程度の倫理観が世界を覆っているとしたら、人類の行き着く先は暗い。ひとりひとりが、今できることをしなければ手遅れになるのは間違いない。

※今年2月に清水さんにご寄稿いただきました記事の後半です。10月現在、死者は4万人を超えています。

この記事は当会のホームページにも掲載しています。

連絡先　関（678-6743）　小林（674-5632）　櫻井（675-6842）　清水（657-3368）